

校内研究10年間の変遷と「学びカフェ」の誕生

― 校内研究の目指すもの・これから ―

伊東 大介（東村山市立青葉小学校）

佐藤 由佳（東村山市立青葉小学校）

1. はじめに

本報告者の一人、伊東大介は、2008（平成 20）年度に東京学芸大学教職大学院（以下、教職大学院）を修了し、2009（平成 21）年 4 月に現任校へ異動、勤務 2 年目（2010 年）に校内研究担当（研究主任）となった。

この間、校内研究担当として、教職大学院での学びが、どのように職務に反映されたか、この教職大学院年報の第 4 集～第 6 集で報告した。

第 4 集では、「教職大学院での学びを活かした実践報告―研究主任業務の遂行と校内研究の推進―」と題して、研究推進委員会の運営方法・運営上の工夫、研究発表の方針・発表に向けての準備、協議会の工夫（ラウンドスタディの導入）、校内 OJD の工夫などについて報告した。

第 5 集では、「教職大学院での学びを活かした実践報告―若手教員との協働による学び（OJD）の事例―」と題して、校内研究を中心として、どのように OJD を実践したか、若手教員に聞き取りを行って報告した。

第 6 集では、「教職大学院での学びを活かした実践報告―研究授業における研究協議会変遷（ラウンドスタディの導入）の事例―」と題して、研究協議会にラウンドスタディを導入した経緯、具体的な実施方法、職員の声などに焦点を当てて報告した。

今回は、本校、校内研究 10 年の歩みを、研究主題を中心に俯瞰するとともに、今後のビジョンをどのように描くか、「学びカフェ」の誕生と共に報告する。同じ学校に、10 年間勤務し、内 9 年間で研究を担当（研究主任）することは、現在の東京都の異動要領では、稀なことであり、この点も記録する一つの理由である。

なお、3. 「学びカフェの誕生」は、佐藤が執筆した。佐藤は、本校勤務 9 年目である。

また、今回、青葉小学校の校内研究の内容を振り返るにあたり、これまで青葉小の校内研究を積み上げてきた先達に敬意を表するとともに、ここで論ずる内容は、これまでの校内研究の内容・方法を批判するものではなく、現在から見て、当時の内容が校内研究の歴史にどのように位置づけられるかを検討しようとしたものである。

2. 青葉小学校の校内研究の変遷

まず初めに、17 年間の研究主題の変遷をしてみる（表 1）。残されていた校内研究に関する文書・資料等では、ここまでさかのぼることが可能であった。学校日誌、学校沿革誌などを調べれば、これ以前の研究主題も分かりそうだが、研究に関する資料が残されているかどうかは不明である。

① 多磨全生園とのかかわり

2002 年をはじめ、その後も、地域・人権にかかわる主題が見られる。これは、青葉小の学区に国立ハンセン病療養所多磨全生園があることに起因する。歴史的には、全生園内に

あった学校、いわゆる「全生学園」がある。全生学園は、1910 年、寺子屋のような形で開かれ、1953 年公立小中学校として認可、1975 年に在籍児童の卒業により小学部は閉校となるが、閉校時は、青葉小の分校（分教室）という扱いであった。また、青葉小学校は、2003～2004 年度に文部科学省人権教育総合推進地域推進協力校の指定を受け、人権のついでに学習・研究発表を行った。そのときに、地域にある多磨全生園について学びを深め、人権について考えよう、というカリキュラムの開発・実践が行われた。発表終了後、主題は変化するが、青葉小の総合的な学習の時間・人権に関する教育の柱をなしているのは、現在でも多磨全生園にかかわる内容である。この辺りの学校としての取り組み内容については、佐久間（2014）に詳しい。

青葉小学校のカリキュラムの中で、重要な位置を占める多磨全生園とのかかわりは、今後、東村山市の「人権の森」構想とともに、継続・検討されるべき教育内容である。

表 1 青葉小学校研究主題の変遷

年度	研究主題・副主題	教科・題材
2002	学ぼう・生かそう・広げよう～地域の宝 全生園～	多磨全生園 人権
2003	思いやりをもち互いに認め合い豊かにかかわる子の育成	
2004		
2005		
2006	伸ばそう！考える力！～分かる喜びを味わわせる算数指導の工夫～	算数
2007	伸ばそう！考える力！～分かる喜びを味わわせる算数指導の工夫～ ～算数的活動を通して、分かる喜びを味わわせる指導の工夫～	算数
2008	伸ばそう！かかわり合う力！～地域を生かして～	地域
2009	自ら学ぶ力を伸ばそう！～地域を生かして	地域
2010	伝え合う力を高める指導法の工夫～地域・人とのかかわりを通して～	地域・人
2011	書く力を高める～国語科を中心として～	国語科中心 書くこと
2012	国語科を中心として書く力を高める ～さまざまな学習場面での活用を視野に入れて	国語科中心 書くこと
2013		
2014	書く力を活かした学習活動の工夫 ～書く力を高める単元・教材一覧をもとにした取り組み～	書くこと
2015	『考える力を高める算数授業の工夫』 ～伝え合い、学び合える子をめざして～	算数
2016		
2017	「考える力を育み高める算数授業の工夫」	算数
2018	「進んで学ぶ子の育成」に関して教員個人が課題を設定	個人による

② 研究主題は、どのように変化したのか

表 1 の中で、太線の部分は、研究主題が大きく変化した境目を示している。

大きく見れば、地域→算数→地域→書く→算数→個人 と 2～4 年のサイクルで研究主

題・教科・領域・題材が変化している。

2010 年度から 2011 年度への変化（地域→書く）、2014 年度から 2015 年度への変化（書く→算数）は、報告者（伊東）がかかわっているのも、これらを振り返ってみる。※2017 年度から 2018 年度の二重波線部は後に詳述。

2010 年度から 2011 年度の変化（地域→書く）は、研究推進委員会で、おおよそ次のような議論を経て決定された。

- ・地域に関する研究は、3 年間で一通り行うことができたのではないかな。
- ・現在の子どもの実態を見ると、書くことで表現すること、書く力をもう少し身につけさせたい。
- ・書く力を付けるのは主に国語科であるが、それを各教科・領域、日常的な活動の中でスパイラルに行うことで、身につけていくのではないかな。

2014 年度から 2015 年度の変化（書く→算数）については、次のようであった。

- ・4 年間の「書く力」を高める取り組みで書くことについての成果は見えてきている。
 - ・児童の実態から、考える力、算数での思考力のような力が更に高まると、これまで高めた書く力と相まって書く力も生かされるのではないかな。
 - ・算数で研究授業をする教員が多くなってきたのは、算数の指導力を高めたいと思っている教員が多いからではないかな。
 - ・算数習熟度別指導を導入しているので、習熟度に応じた指導法の検討が大切ではないかな。
- というような内容であった。

このような議論を研究推進委員会で集約し、年度末の職員研究全体会や職員会議で次年度の「方向性」が決定されていった。

このような研究主題の決定は、多くの学校で行われていると推測される。このほかにも、管理職の意向が強く反映される場合、「現代の教育課題」解決のために、新しい教科などの指導方法の確立のために、新学習指導要領への対応等いくつか決定の様式が存在していることは、例えば東京都の各小学校の研究主題を見ることによって考察される。

伊藤（1990）は、「教師が変わる授業が変わる校内研修」の中で、校内研修プロセスの図式化を行っている（図 1）。これを一つの指標として、青葉小の校内研究を主題決定からまとめまでを見てみる。

③ 校内研究のプロセス

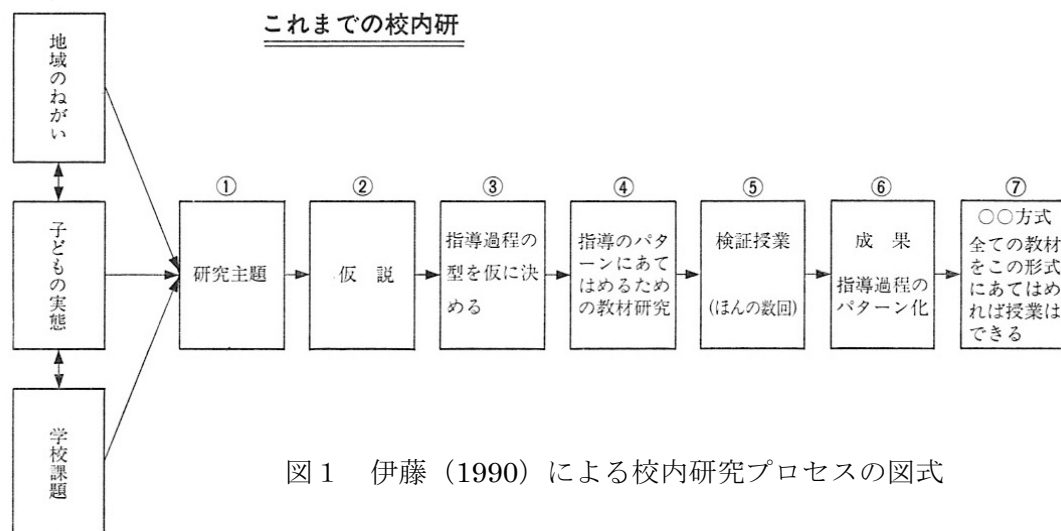


図 1 伊藤（1990）による校内研究プロセスの図式

まず、①研究主題の決定については、子どもの実態から考えていること、学校課題の中に算数指導の体系的な（習熟度別指導など）課題が含まれていれば、これに当たるかも知れない。つまり、青葉小の研究主題の決定様式は、「地域の願い」をのぞいて、ほぼこの図式に当てはまる。

次に、②仮説については、青葉小は2011年度以降、立てていない。これは、校内研究が仮説を検証するような「研究」ではなく、児童に力を付けさせることが学校としての「研究」であると、研究推進委員会で確認されたからである。いわゆる「仮説検証型」もつとえば「仮説すり寄り型」の研究は、この段階で行っていない。

③指導過程の型を仮に決める及び④指導のパターンに当てはめる、についても、このような内容には取り組んでいない。ただ、研究の内容が「書くこと」と「算数」であったために、「書くことについての表現過程」つまり「課題設定、取材選材、構成、記述、推敲、交流」という過程、また、算数における問題解決の過程つまり「問題提示、課題把握、自力解決、集団解決・学び合い、まとめ・振り返り」といったような過程を踏むことは研究された。書くことについての表現過程は、これは学校の学習活動に限らずこの過程を踏むことであり、指導過程の一般化とはとらえない方が良くであろう。また、算数での問題解決の過程は、これに準拠しながらも、「常にこの形で授業を構成する」とはならないように研究推進委員会で共通理解を図って進めた。

⑤検証授業については、仮説を立てていないので、検証授業ではなく、研究授業として行われ、各学年＋専科で計7回行われた。

⑥成果 指導過程のパターン化 ⑦〇〇方式 全ての教材をこの形式に当てはめれば授業はできる、を成果とはしていない。成果は、児童の学力の向上と教員が授業研究を通して得たもの全て、つまり教師としての成長ということになる。

これを、伊藤の校内研究プロセスを借りて図式化するとこのようになる（図2）。

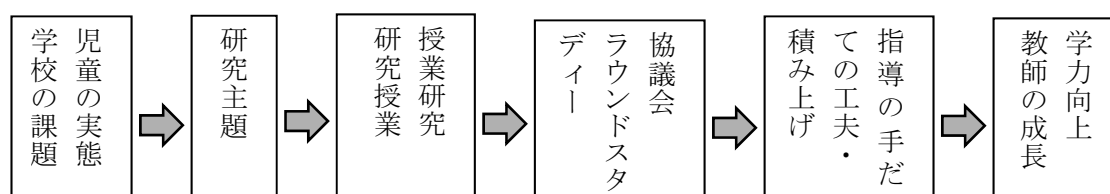


図2 青葉小これまでの校内研究のプロセス

指導過程を一般化するような目的がないので、教師は、その教材を、子どもの実態に応じていかに「料理」し「提供」するかをそれぞれ考えることになる。その際に「指導の工夫」が生まれ、その工夫が、児童の学力を向上させ、教師の力になっていくという構図である。

これで、校内研究としては成果が上がっているといえ、上がっているように思われたのだが、研究を進める中で、次のような疑問が生じてきていた。

まず、児童の実態から研究テーマを決めるという手順は大事にしてきたつもりだが、果たして、その実態というのはどの程度「学校全体」の実態なのであろうか。確かに、算数の学力も付けたいが、国語の力を付ける方が先のクラスや児童もいるだろう。また、児童にアンケートを取ったからと言っても、取りようによっては、先に主題が決まっていて、後付の理由になることもあるだろう。「算数の力も付けたいが、国語の力も、社会の力も、

体育の力も付けたい」、「たまたま今年は算数の力を付けたい」と思っている教員が多いから、あるいは算数を主題にしたいと思っている教員の話が説得力があったから算数にしよう、などというように考えると、児童の実態に基づいて研究の内容を決定していくとはどのようなことなのか、ということである。国語の指導に取り組みたいと思った教員が国語の研究ができずに、しぶしぶ算数に取り組むなどということは、学校現場ではよく見られる光景である。また、専科や特別支援教室の教員にとってみれば、教科を限定した校内研究の取り組みには、距離を感じざるを得ないだろう。

次に、教員のライフステージに合わせた研究ができているのかということである。新規採用の教員も、50代のベテランも、今年度異動してきた教員も、同じ研究主題で取り組むことになる、これが果たして、その時期にその教員が取り組むべき課題なのであるだろうか。そして、自分の取り組みたい研究内容とはかけ離れた内容に取り組まざるを得ず、研究への意欲は低下し、前向きになれない・・・・・・まさに、教員の「関心・意欲・態度」の評価が△になってしまうのではないかという「実態」である。

また、「研究テーマを決めてもらわないと、何をしたらいいかわからない」という声も聞くことがある。教師として、日々の実践の中で研究テーマをもたないということは考えられないが、恐らく、そのような課題意識をもっていないのであろう。

このようなことから、2018年度からは「個人課題」を設定し、それを追究していく取り組みを始めてみた。次の表2では、個人課題一覧を示す。これについては、まだ、半年し

表2 青葉小学校 2018年度個人課題一覧

2018 校内研究「進んで学ぶ子の育成」 個人課題一覧 20180910(月) 現在

氏 名	課題（テーマ）
	「支持的風土のある学校・学年・学級づくり」
	副校長としての「進んで学ぶ子の育成」とは
	自信をもって自分を表現できる子の育成
	主体的・対話的に学べる授業づくり
	児童の「自己教育力」を高めるための授業づくりと支援の手立て
	ストレスフリーな授業づくり
	児童に自信をもたせる授業づくり
	「児童が思わず話し出す授業の工夫」
	「すすんで学ぶ」授業の形式の模索
	「外国語を楽しく表現する学習形態の工夫」
	「アクティブラーニングを取り入れた指導法の工夫」
	「児童が友達と共に学び、自ら学ぼうとする意欲を高める授業の工夫」
	体育を生かし、自主的に行動できるような学級づくり
	「内発的動機付けを高める指導と評価の工夫」
	主体的に活動できる授業づくり
	「自分の考えを持ち、表現する児童の育成」―書く活動を通して―

	「全生園」を通した人権学習
	「自己解決・自己取組」考える力
	「外国語を学ぶことに楽しみを見出せる学習」
	「主体的・対話的な学びを目指した学習活動の工夫」
	「安心して学校生活を送るための、自己認知を育む授業づくり」
	「個に応じた指導方法」
	「特別支援教室での指導の研究～日常生活への般化を視野に～」
	〇くんが自分の気持ちを言葉で話せるようになるための支援
	いい音みつけて 表現できる子
	高学年が思いをこめて描ける平面作品
	学んだことを進んで家庭生活に生かそうとする児童の育成
	「心と体のつながりに気づかせる健康相談活動」
	人とのかかわり、主体的に学ぶ子を育てる算数の授業づくり

か経っていないので、結果を、次年度の年報の紙面をお借りして報告できればと思っている。

個人課題の設定と合わせて、研究の方法も変えている。これまでの、指導案の事前検討に膨大な時間を費やすような研究を止め、その日の授業、その教員の取り組みから学んでいこうというスタイルへの変化である。これは、石井（2017）の言葉によれば、効果検証志向の授業研究から経験理解志向の授業研究への変化の一步である。

また、個人課題については、「教師教育研究ハンドブック」（日本教師教育学会2017, p.264）に次のような記述がある。「学校統一のテーマにのみ基づき研究を進めようとする、トップダウン的に掲げられた方針に、ただ受動的に従う教員が生まれやすい。また、授業案の検討や研究協議会の際に、強い発言力や影響力をもつ教師が議論を牛耳り、ほかの教師は周辺化されてしまう状況にも陥りやすい。」

図3は前述の伊藤（1990）が校長として校内研究を行った学校のプロセスである。

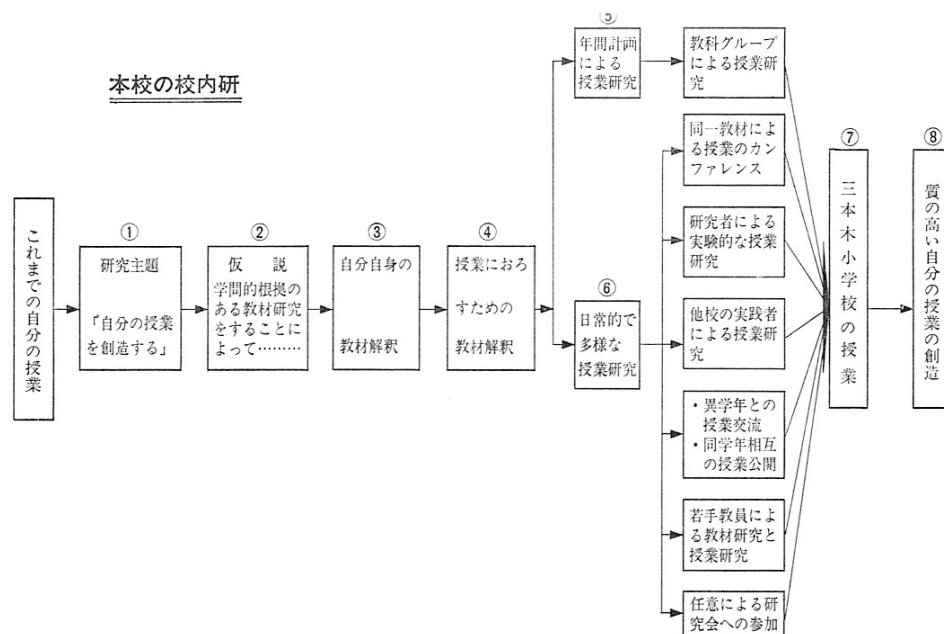


図3 伊藤（1990）による三本木小学校の校内研究プロセスの図式

図1及び図3から、2018年度の青葉小の研究を、今後の目指す姿も含め図式化してみた。

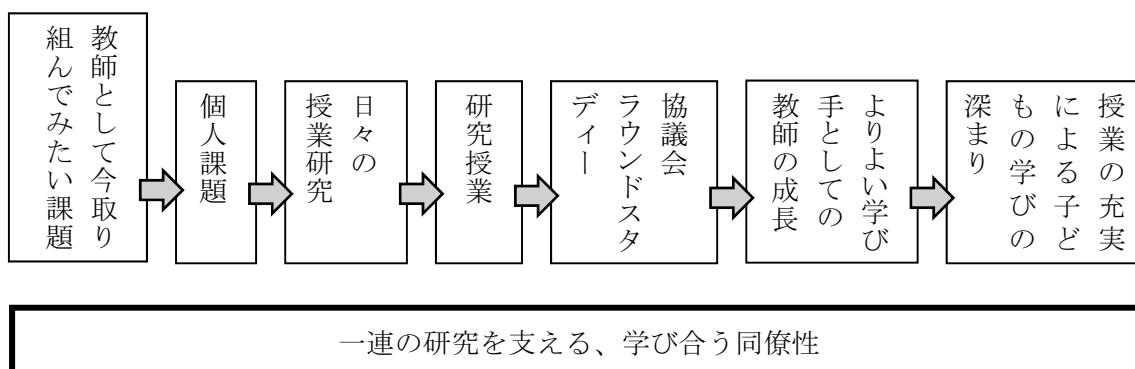


図4 青葉小学校 2018 年度校内研究の今後の見通しを含めたプロセス

④ 何が変わったのか

10年間の校内研究の中で、何がどう変わったか、ということは、そう簡単に言えることではないが、一つ言えることは、協議会へのラウンドスターディーの導入によって、「自分たちで考えよう」という雰囲気が、職員室に芽生えてきたことである。講師頼みの研究授業ではなく、授業研究という学びを楽しむ教師の誕生と言ってもいいかもしれない。この雰囲気から「学びカフェ」が誕生することになる。

3. 「学びカフェ」の誕生とカフェの実際

研究推進委員として青葉小の研究に携わり、校内研究が日常の学校生活や授業改善へとつながってきている実感が少しずつ沸いてきた。そんな中、職員室の中で以下のようなことが一部の教員の間で話題となった。

- ・授業のことを話したり、教材について深めたりしたいけれど、忙しくて時間が取れない。
- ・授業の計画をする中で、「この教科の本質とは何だろう」「そもそも何のためにこの学習をするのだろう」「評価は子どもたちのためになっているのだろうか」などの話題にまで話が及ぶこともあるが、それは稀で、実際は（子どもたちを）どう動かすかを決めて終わってしまうことが多い。
- ・学年を越えて教員同士が学び合えるような場がほしい。
- ・〇〇について詳しいあの先生に話を聞きたい。
- ・自分が探究していることについて話したい。（参加した研修で良かったことをみんなに伝えたい。一緒にやってみたい。など）

そんな中、「効果10倍の＜学び＞の技法～シンプルな方法で学校が変わる！」（PHP新書）を読み、その中で触れられていた「まじめに雑談する場」を校内に作ることはできないかと考えた。職場には、性別や経験年数、得意教科などが異なる先生がたくさんいる。その先生方ともっと話してみたいという気持ちがあった。また、OJTと言うとベテランから若手へ伝達するというイメージだが、若手の中にも様々な経験をしている人がいる。受け身な学びの場ではなく、それぞれができるだけフラットな立場で自由に参加し、語り合える場があるといいのではないかと考えた。

「学びカフェ」の場として、月に1回自由参加の形で1時間の枠を設定した。仕事が一段落する16時～17時までの時間設定としたかったのですが、校長にお願いして休憩時間後の16時30分～16時45分を「学びカフェ」の時間に含むことを認めてもらった。「学びカフェ」の名称については、“気軽に参加できる居心地の良い場”のイメージから「カフェ」とした。「学びカフェ」のお知らせは、手書きのチラシを作成し、教員の机の上に置くこととした。

実際始めてみると、毎回約4～7名程度の参加者があった。固定されたメンバーではなく、その日の内容によって様々な教員が参加した。はじめから終わりまで居られなくても途中参加する先生もいた。若手の先生が多く出席するかと思っていたが、中堅やベテランの参加が多かった。

テーマは、参加者で話し合いたいテーマを募り、決定する。参加者の中から特に出ない場合は、主催者側で決定した。

実際に行ったテーマは、以下のとおりである。

- 第1回 読書の推進、ふり返りジャーナルの実践について、外国語教育について
- 第2回 外国語での読み聞かせ（実演） 低学年の学級経営
- 第3回 外国語での読み聞かせ（実演） 宿題は必要か
- 第4回 ブックカフェ（おすすめの本紹介）
- 第5回 プロジェクトアドベンチャーをやってみよう
- 第6回 わたしの学級通信
- 第7回 学級経営におすすめの本
- 第8回 1年の目標 今年度の活動計画
- 第9回 道徳の授業 どうしていますか？
- 第10回 学級会をしよう
- 第11回 ルーブリックを作ろう
- 第12回 実は身近なカリキュラムマネジメント
- 第13回 プロジェクトアドベンチャーをやってみよう



始めたころは、テーマを複数用意していたが、深めるには1つの方が良いということになり、1つに絞るようになった。

はじめてます!

学びカフェ

日々の授業について話し合ったり、学び合ったりしませんか？

クラスでやって
みたらとっても
おもしろかった
ゲームがある!

今、考えている
授業プランを
なにかかに相談
したい!!

休開修に出て聞いた
言葉がヒトでもあった?

自分の中でテーマにして
取り組んでいることに
ついて意見をもらいたい

授業のこと、子どものことを話し合ったり、考えたりしながら
勉強できる場所があるといいな! と思い、このような会を作り
たいと思っています。ぜひ一緒に勉強しましょう?

第1回目 **9月5日(火)**
4:00～5:00
(マイカップ持参)@算数教室

今後も月1回程度
火曜日の4:00～
5:00に行っていく
予定です。

☆ご質問は 佐藤までお願いします。

一番参加者が多かった回は、第4回の「ブックカフェ」の回。それぞれが、好きな本を持ち寄ることになっていたのだから、10名以上が集まり時間が足りなくなるほどだった。学校図書館司書の先生もこの日は残って参加してくださり、楽しいひと時となった。本について語ることで、その人がどんな人なのかが伝わってくるのがおもしろい。また、その場で本の貸し借りが行われたり、ブックカフェ後も本について職員室で参加者同士が交流したりする姿が見られた。

第2回の「外国語での読み聞かせ」については、校内に国際結婚されている方がいてその方がお子さんに英語で読み聞かせをしているとの話を聞き、「学びカフェでぜひやってもらおう」ということになって実現した。グロッケンで音楽演奏をしながら1年生の教科書にも載っている「おおきなかぶ」を英語で読んでいただいた。その世界観に参加者みんなが引き込まれ、魅了されていた。これをきっかけに、ゲストティーチャーとして読み聞かせに来てもらうクラスが出てきたり、外国語の授業で読む本選びの相談に乗ってもらったりする人が出てきたりした。また、第2回目の学びカフェに参加できなかった方から、ぜひもう一度やってほしいというリクエストがあり、3回目の時にも読んでいただいた。

第6回「わたしの学級通信」では、それぞれの学級で出している学級通信を持ち寄り交流した。普段、学級通信を出していても、なかなか学年を越えて交流することは少ない。この日は、まずそれぞれの学級通信を参加者で回して見合うことから始めた。その後、ミニホワイトボードを使って、「タイトルの付け方は？」「どのくらいのペースで出している？」「出してよかったことは？」などのお題に答え、交流した。話し合う中で、子育て経験のある先生から「保護者目線でどのような情報があるといいか」ということを聞いて若手の先生がメモをしていたり、「出している頻度は自分の心のゆとりを表すバロメーターになっている」という気づきがあったりと学びが深まったように感じた。

第9回「道徳の授業 どうしていますか？」は道徳が教科化し、どのように進めていくべきかみんなが気になっていたため話題とした回であった。参加者は5名程度だった。まず、現状としてどのようにこれまで道徳授業を行ってきたかについてそれぞれが話した。道徳の教科書を見ながら、よさや使いづらさを率直に交流する。「子どもたちに道徳的価値を押し付ける形になるような授業はしたくない」というのが、その時参加者から多く出た意見だった。テーマとなっていることをいかに自分に引き寄せて考えさせるかが鍵となるとの話になった。「考え議論する道徳」という意味について考えていく中で、昨年の道徳教育推進委員を担当していた先生の話などをみんなで思い出しながら「考え議論するとはどんなことなのか」について話し合った。教科書の取り扱いのことや評価についての疑問がクリアになってきたので、参加者の1人であったM先生（今年の道徳教育推進委員）が、市の研修で今出た疑問について聞いてくるということになった。（後日、M先生はこの内容に関して資料を作成し、教員全員に配布してくださった。）その後、自分が行ってきた道徳の教材を共有する時間となった。T先生は低学年の先生で、子どもたちが視覚的に理解しやすい教材を実際に持って来ていた。意思表示カードを使った授業を紹介してくださり、参加者はそれを手に取りながらT先生の実践について聞いた。S先生は、教科書を使った授業よりも自分の見つけてきた教材を使うのが好きで、これまで行ってきた授業の資料をファイリングしていた。参加者に資料提供をしながら、実際の授業で子どもがどのような反応を見せたかなどについて話し、質問に答えた。また、授業づくりの際参考にしている道徳

「学びカフェ」を始めて1年。いくつかの課題も感じている。まずは、時間についてである。週1～2回しか本校に出勤しない特別支援教室の先生方が参加しづらい実態がある。特別支援教室の先生の勤務日は会議が入っていて、「学びカフェ」の予定が入れないことが多い。参加したいとの声もあるので、うまく日程を組んでいくことができればと模索している。

また、参加者をいかにして増やすかも課題である。相互交流しやすい人数としては4～7人程でよいのだが、校内の学びを活性化させていくためには、参加のハードルを下げ、もう少し気軽に参加してもらえたらと感じる。「行きたいとは思っているんだけど、その時になると忙しくて…」という声がよく聞かれる。若手の教員は特にそのように感じるのかもしれない。日々の仕事に追われているのはよく分かるが、だからこそ職員間の連携を強め、互いに助け合い高め合える集団の構成員になっていけたらと思う。参加を強制すれば、主体的な学びの妨げとなるが、「参加するきっかけがほしい」と思っている人も少なくないようだ。自然な形で声をかけて誘ったり、雑談を通して教員個人の興味関心や学んでいることを引き出し、話題提供者になってもらったりする方法を考えている。話題提供者は、そのテーマの熟達者である必要はない。学びを楽しんでいる人、学んでみたいことがある人、何か迷っている人…で構わないのである。そのような気軽な参加の仕方でも、参加してよかったと思える場となっていけば嬉しい。

校内に「学びカフェ」を始めて感じたことは「実は学びたがっている人が多い」と言うことだ。ただ、「お金を払って研修に行く」「校外の学びの場に出ていく」そこまではできないという人が多い。働き方改革という言葉も話題となっているが、「勤務時間は決まった自分の仕事をこなし、時間が来たら仕事はしたくない」そんな人も増えているかもしれない。それでも、やはり教師としての指導力を高めたいという願いはみんな持っていることだろう。「学びカフェ」は、今ある資源を最大限に利用した学びの仕組みとなりうるのではないだろうか。今後もその可能性について模索していきたい。

<参加者の声>

- ・普段は学年の人と話すことが多いが、学びカフェでは話さない人とも話せて新鮮味がある。他の人がどんな実践をしているのか具体的な話を聞くことができ、自分もやってみたいことがたくさんあった。自分がこのテーマについて知りたいということについても話題にしてもらえるのがうれしい。行く前は、「ちょっと時間がないなあ」と思っていたけど、参加して終わった時には「来てよかったなあ」と思うことができる。
- ・学びカフェに参加すると自分が子供目線で学ぶことができます。メタ認知できる場です。講演会で学ぶよりも自然な形で学べてとても居心地がよく、それはこの場への信頼感があるからだと感じます。義務感からではなく、それぞれが興味のあることを真剣に話し合うので内容が濃く、知的好奇心が高まります。
- ・テーマに興味があるときに参加しています。話を聞くだけでなく実際にやってみたり、考えたことを話したりできるのがいいです。
- ・今、教育に関するタイムリーな話題がテーマとして取り上げられていてよい。(道徳・外国語・カリキュラムマネジメントなど) 子育て中で参加する時間がとれないことも多い

が、学びカフェ後に配られるお便りはよく読んで参考にしている。

- ・プロジェクトアドベンチャーのテーマの時に参加しました。本や資料で読むだけでは分からないので実際に体験してみてよかったです。やってみなければ分からないことはたくさんあります。学びカフェでは、実践できたり話し合ったりできるのがいいです。
- ・他の先生がどんな実践をしているのか知ることができてとてもいいです。参加すると、1つのテーマについて深められたり、いろんな意見を聞けたりします。気軽に参加でき、率直に話し合えるのがいいです。

4. まとめ、そしてこれからの校内研究

10年間の校内研究を振り返って思うことは、各学校がよく「考えて」研究を進めることが大切ではないかということである。当たり前と思われるこのことを、実際に行っている学校がどの程度あるか、興味深いところである。前年度の方法をそのまま踏襲する、ほかの学校で行われてる内容・方法をそのまま取り入れる、「〇〇では」「〇〇によれば」と通達や法令などに研究の根拠を求める、先に研究教科が決まってい理由を後付けするなど、もう少し考えて進めてはどうかという例は、枚挙にいとまがない。

そして、研究指定を受けた場合など、その期間内で「成果」を求められる。短ければ1年間、標準で2年間、長くて3年間だとして、その期間の中で成果を出そうとすれば、当然見通しがもちやすく、「成果」が分かりやすいものに取り組まざるを得ない。そこにどんな「成果」を見出だすか。

校内研究における「成果」とはなんなのか、それを考えることが研究のスタートと言ってもいいかもしれない。

そのようなことをクリティカルに思考し、教師一人ひとりが、よりよい学び手として成長し、相互に影響し合う集団の誕生こそが、研究の成果の一つではないか、そのように考えている。

よりよい学び手としての教師が、児童の成長に与える影響もまた、大きいものがあるように思う。

引用・参考文献

- 石井英真、原田三朗、黒田真由美（2017）「Round Study 教師の学びをアクティブにする 授業研究－授業力を磨く！アクティブ・ラーニング研修法」 東洋館出版社
- 佐藤学（2012）「学校を改革する－学びの共同体の構想と実践 岩波ブックレット 842」 岩波書店
- 佐藤学（2000）「授業を変える 学校が変わる」 小学館
- 日本教師教育学会編（2017）「教師教育研究ハンドブック」 学文社
- 伊藤功一（1990）「教師が変わる授業が変わる校内研修」 国土社
- 吉田新一郎、岩瀬直樹（2007）「効果 10 倍の＜学び＞の技法 シンプルな方法で学校が変わる！」 PHP 新書
- 佐久間健（2014）「ハンセン病と教育－負の歴史を人権教育にどうかすか－」 人間と歴史社